

県書連会報

第 1 号

栃木県宇都宮市花房 3-2-25
TEL (0286) 34-0622
〒320
栃木県書道連盟
会長 七海 水明
編集 事務局
印刷 栃新印刷株式会社
振替口座 宇都宮5-15222

栃書連会報発刊に寄せて

会 長 七 海 水 明

この度、役員各位の御協力、編集委員の御尽力によって、会報発刊の運びに至ったことは、私として大変うれしく思うところです。年度内の事業や会計報告などは、総会の資料として用意はしたものの、出席者は約六十名位が例年の数であり、出席された方の御意見は聞くことが出来ても、会員の総意が何辺にあるかは中々掴みにくかったことや、各地区の活動状況、それぞれの社中展の御案内をいただきましても出かけることもできず、その実態を知ることなく、何とも心苦しく存じておりました。今回の会報を手がかりに、

すのでよろしくお願い申し上げます。

◇地区役員の方は、地区の活動状況を常に把握して下さい、お知らせ下さい。

◇社中の主宰の方は、社中展の様子をお知らせ下さい。会場の様子、作品の写真(五点)もできればほしいものです。

◇会員各位は、個展中央の所属グループ並びに日展、毎日展、読売展その他の公募展への出品入選入賞などお知らせ下さい。また本会の発展、充実ははかるための貴重な御意見を遠慮なくお寄せ下さい。

創刊ともいふべき本号の中に、本会発足(昭和二十三年)以来の歩みを載せたいと思っております。

たが、資料が整わず間に合わないかったことは何としても残念であり、申訳なく存じ、深くお詫び申し上げる次第です。できるだけはやく整理しまして特集として発刊したいと考えております。



書道実技講習会について

県書道連盟・県書写書道教育研究会共催による講習会は、日展審査員・千紫会理事長、小暮青風先生を講師に迎え、五十六年二月(五日)に開催された。会場に当てられたホテル丸治には、開始十時にはあふれんばかりの参加者が集い、熱気に満ちた講習会となった。テーマは「楷書の基本的研究」ということで、初めに楷書の法則性を生み出していた歴史的背景を中国は魏・晋・唐、日本は多胡郡碑・空海・良寛にわたる広範囲の書道史の講話がなされた。実技では、午前中は基本点画十二種について用意された二枚のコピーを全員に配布し、点・横画・縦画・はね・はらい等について黒板に貼った模造紙に夫々の用筆法・運筆法について繰り返し懇切丁寧な範書を示され、更にグループ毎に机上の基本点画揮毫によって姿勢・執筆法に至る迄徹底的な基礎指導をいただく。先生の温潤な線美が印象深い。午後は孔子廟堂碑の解説と臨書

が行なわれ、「永」字では全員が添削をしていただく。こうした楷書基本点画の厳格な指導は書壇の第一人者ならではの感銘深い姿であった。

まとめとして、小暮先生の作品集「万葉秀歌選」を用いて、作品制作の仕方や鑑賞法にふれ、優れた作家の思想情性の魅力に酔い、最後に作品の中からうたわれたあの美しい万葉の朗詠は忘れることが出来ない。

今回の講習会を振り返って、流派を超越して、古典に立脚した書道観を持つことの大切さを痛感すると共に、今後ともこのような有意義な講習会が数多く催され、我々の書道に対する広い見識と深い研究心が培われることを念願してやまない。

(中野永峰)



連盟賞
受賞のことば

手島 映次

晩酌も十時頃になると覚め始める、その頃になって重い腰を上げ、覚めかけた神経が集中しないのか線があれ、一時眠気に襲われこの辺で感じ良く書けないと焦り始める、二時頃が近づくと夜具の上につぶせに、そこで寝るか寝ないか起き上って挑戦、書いたものが連盟賞をいただけました、受賞ありがたく思っています。

桜井 敬朔

通勤途中の長屋門の白壁の白と五月の青草との鮮やかなコントラストを書表現の中でどのように処理するか、ということがあの作品のポイントでした。結果的に基調は白、墨はできるだけ消去するという方法をとりました。それが評価されたのかなと思っています。

今後、この賞を汚さぬよう努力いたしますのでよろしくお願いたします。

一九八一年六月三日



妄語三題

東 僊 窟 主

どこの書展を見ても行草体が多い。八九割がそうだ。行草体が主流を占めている。行草展と云っても差支えない。その昔は知らないが、やはり行草が中心だったのだろうか。三筆以後の第一人者といわれる、貫名松翁は当時（縁はかかるものにあらず、我が篆隸、格に入らず）として書かなかったという。資料の乏しかった時代においての言

は見識と言えるかも知れない。しかしこの松翁には楷書の優れた作品がいくつもある。それもそれぞれ趣の異つたものである。資料の入手が容易になった現代になぜ行草にばかり、こだわるのだろうか。

どうして読めもしない文字や文章を見て習うのだろうか。殊に碑の場合は、いたみ、のひど

中国訪問記

兼 目 悠 久

北京に到着、中国の大地に一步をしるしたとき、そして各地を訪問したとき、通訳さんや博物館の人々から、「日中友好書道訪中団の皆様方を熱烈歓迎いたします!!」の挨拶を受け、本当に心暖まり、中国の国家及び人々に感謝せずにはいられなかった。そして、それらの言葉が偽りでないことは、人々の眼と応待を見ればすぐ分った。穏やかで、親愛の情がこもり、行く先々の中国人の人々すべてに共通するものであった。

大国であろうが、小国であろ

うが、それぞれの持つている主権を互いに尊重し、尊敬しあうという理念を改めて認識させられた。我々を白い眼で見たり、そっぽを向いたり、或いは無関心であったりなどということは、十三日間の中国滞在中、ただの一度もなかった。

まず北京の西、大同へ。雲崗石窟を見る。東西一キロメートルに渡って五十三の石窟と仏像群。とにかく山壁すべてこれ石窟という感じ、雄大でスケールの大ききよ。仏像の表情それぞれに、中国の長い歴史を感じた。

ものも多い。それを苦勞して、ムリしてまで、なぜ習うののだろうか。

書法を深めるためであるという古人と対話するためだとも。その他いろいろあるようだ。甚だ深遠なことである。そこで臨書の目的をしつかり捉えておかないと、つい、いやけがさし根気負けしてしまう。筆を投げ出すことになる。迷わずにすむ心構えで取り組むことが必要である。

展覧会場で、時に、作品評を

大同より大原へ。落着きのある町である。晋祠公園内の建物は、日光東照宮の源流のような彩色の美しさであった。公園の角に、唐太宗皇帝の「晋祠銘」を見つけ、一同喜びと共に緊張して凝視する。貞観二十年正月廿六日の碑額、碑の本文を追ってゆく。それぞれの文字は二センチ平方位である。伸びた線、広がりのある結体、実物は全く素晴らしい。そして石の面の光沢が何とも言えない味わいだ。之

字三十八字も目につく。この晋祠銘の左側に全く同じ大きさの碑がもう一つある。見るとこれも晋祠銘である。聞くと、これは贗物だと分ったが、中国人の複製力と言うか、バイタリテ

乞われることがある。これは荷の重いことである。評はその人の力を示すことでもあるから。作品を作る力程度にしか見る力がない。という一面があるからである。したがって見る人、個々によつてその評も当然異なる。評と言っても実は感想なのだから、それだけで多々多くの声を聞いて、自分で判断したいものである。

イーにも驚嘆した。

晋祠銘は群馬県の高胡の碑のように、祠の中に鎮座しており、入口は格子戸になっていた。中は撮影禁止で、碑の姿や碑文など写真に収められなかったのが、誠に残念であった。

今回最も期待していた唐の都であった長安——現在の西安へ。圧巻なのは、何と言っても西安碑林。正に密集した樹林の如く碑の林立である。碑と碑の間の通路は回廊の如しである。全部で一〇九五の碑とか。王羲之、歐陽詢、顔真卿らの碑、順次丹念に見ていく。とにかく疲れる。孔子廟堂碑、皇甫誕碑、多宝塔碑等八つの碑は、碑面の上にとつた拓本を全く重ねあわせ、そ

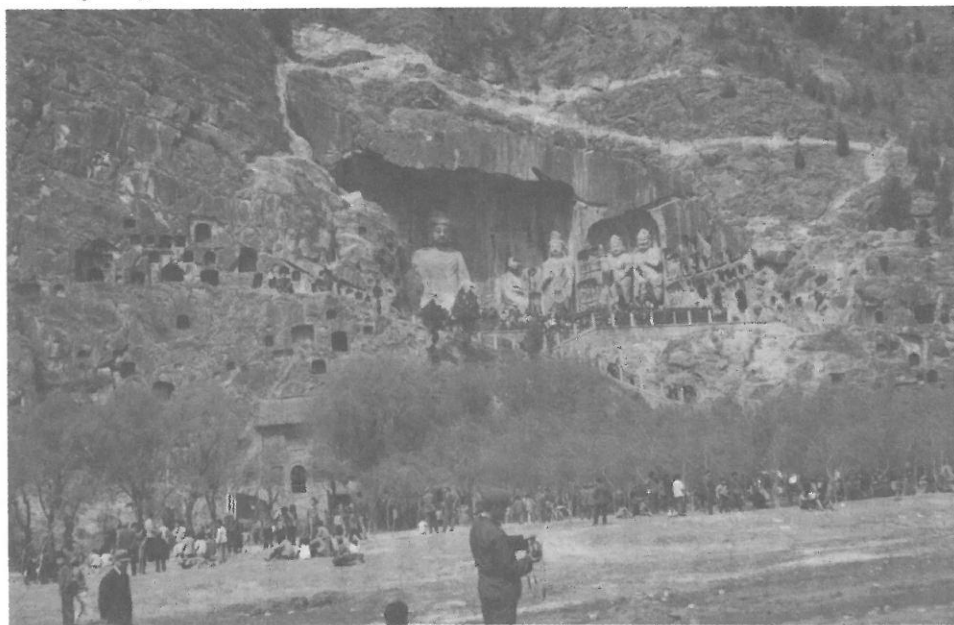
して碑そのものを分厚いガラスで覆ってしまっている。これを見た瞬間何かしら不自然な違和感をいだいた。

西安より洛陽へ……旅も終わりに近づく。洛陽郊外竜門石窟へ。穏やかな伊水の流れ、柳の緑が美しい。約一キロに渡る石窟と佛像群。見ていく途中、石窟の傍に石灰岩の岩肌に直接刻みつけられた伊闕佛龕碑を見つけたときの驚き。こんなに素朴な姿で彫られていたのか。手でそつとふれたりして石の感触を楽しむ。早速カメラのシャッターを押す。

竜門二十品の中、十九品ある古陽洞で多くの時間を費やす。幸い晴天であったが、中は薄暗い。望遠鏡を借りて見る。あつた始平公造像記!!これは陽刻で大きい方なのでよく分る。円くえぐられた洞の壁面に碑は点状する。拓本をとった後の墨が黒々に残っている碑もある。天井にもある。カメラに収めたが、距離があるのと見上げる角度で、よくは写らなかった。

今回の中国訪問は、三月二十八日より四月九日迄の十三日間、北京—大同—太原—西安—洛陽—北京と中国北部の旅であった。中国の広大な大地と古い歴史、そして益々発展する現在の中国

の姿に接することができたのは得難い体験であった。そして、今も中国の人々の暖かい心温を感じる。



写真は「竜門石窟」

競書雑誌紹介

墨池

川俣古舟主宰、毎月五月発行、月刊書道誌、定価二五〇円(郵共)発行所・宇都宮市一条四一三八・墨池会

大正十一年山崎東道の創刊に係り、(一)書道の大衆化(二)指導懇切(三)誌代低廉(四)通信迅速を指針とし、競書成績がその翌月の出書メ切前に判るのが特徴。東道没後古舟継承。現在、会員は全国に及ぶ。主なる執筆者白石宙和、小林翠寛、川上尚雲、川俣三千木、古舟。昨年三月七〇〇号記念書展開催。

臥龍会

昭和十五年、故日賀野東華の主宰により書道研究団体「臥龍会」結成、同時に研究者のために月刊の書道雑誌「臥龍」が刊行された。

その後、第二次世界大戦の激化のため半年の間休刊となったが、戦後の二十一年全国の書道誌にさきがけ、いち早く復刊し現在では通巻して八五〇余の号数を重ねている。

その間、会員の増加に伴い、二十四年より雑誌を一般用と学生用とに分離刊行を実施し、それぞれの研究分野も独立させたこのことは数ある書道誌にはあまり例のない編集であり、臥龍会の大きな特徴といえるだろう。競書雑誌の大半は通信指導によって行われているが、四十九年より実技の直接指導、研究の必要性から市内に教場を開設し数名の講師陣により、実地指導も行い、書学者の研究成果を挙げている。

本部 宇都宮市大寛二一六二二
代表 日賀野 博



通信欄

会費未納の方は
左記へお送り下
さい。

宇都宮市一の沢
五〇三
作新学院内
重原聖鳥

